「俳ソサエティ句集～山葵」まえがきにかえて

黒柳双掌・斎藤修風・毛里井静の三名を発起人とする「ハーフ・シリアスな《俳ソサエティ》へのお誘い」というファックス(!)文書が発出されたのは、一九九四年六月四日のことであった。同案内状には、俳ソサエティ発足の趣旨として「平素、研究・教育に、あるいは業務・家事に心身を酷使して、ひたすらお忙しくお過ごしの諸兄姉と、時に俗世界を脱し、侘びと寂びとに彩られた言葉の世界に魂を遊ばせる機会をともにしたいというところにあります」としている。「ハーフ・シリアス」としているのは、もちろん「ハーフ・ジョーキング」という意味で、「気取らず・形式ばらず・理屈をこねずという【三不主義】を基本精神としている」とも説明している。

この文書は、当面の具体的行事として

①年四回(春・夏・秋・冬に各一回)程度の投句形式の句会開催、

②年二回(夏休みと春休みに各一回)程度の吟行(当面は日帰り)の実施、

そして出来れば、不定期の句会報『山葵』の配布

の三つをあげている。

このことから明瞭なごとく、それは到底「結社」と呼びうるようなものではなかった。正直なところ、この会合は「俳ソサエティの画像掲示板」というネット上の対話の場と、「新春句会」と、ごくまれな「吟行」がすべてという、かなり雑駁な仲間であった。俳ソサエティの仲間は二つの共通点で結ばれていた。一つはその職域が国際関係論の「研究」分野であったこと、もう一つは「酒好き」という嗜好である。

こうした趣旨に賛同して入会の意思を示されたのは、次の一一名の諸兄

姉であった。なお、お名前の後の句は、句会参加への「決意表明代わり」としてお願いしたものである。

安部公子(きみ女)
稲葉千晴(嗚呼晴)
縁台で待ったといえぬへぼ将棋
岩橋信枝（伸恵）
小田英郎（霧岳）
加茂雄三(菫山)
甲府路を急ぐ車の暑さかな
黒柳米司(双掌)
ひるがほの性にはあれど炎天下
斎藤修(修風)
櫻川明巧(明陽)
佐藤榮一(東峰、のち秀峰)
毛里和子(井静)
吟行や買ひそびれたる花菖蒲
山極晃(栗毬)
早や母の四十七回忌栗の花

下記の写真は、一九九四年一一月一九日、記念すべき第一回句会が東京千代田区の「割烹（！）味館」で開催された際の集合写真である。

かようにひ弱な基盤の上に設立された俳ソサエティがその後、三十余年にもわたり存続できたのは、毛里興三郎(荒人)・和子(井静)ご夫妻が、ご自前に亭々たる欅林があるところから――遠藤周作の「狐狸庵」になぞらえ――「欅里庵」という庵号をつけて句会の場としてご提供くださったことに負うところ大である。

井静さんは現代中国研究の第一人者であり、二〇一一年「文化功労者」として顕彰された。二〇一七年の講書始の儀では、皇居松の間で天皇(現上皇)ご夫妻に日中関係についてご進講もされた大家である。

学の粋講書初めや淑気満つ　　双掌

ご夫君荒人さんは、定年後一念発起され東京外大でアラビア語の習得に挑まれた由。その俳号は、かの魔法のランプを駆使するアラジンに因むとお伺いしている。

もう一つ、わが俳ソサエティが飲み会と混然一体をなしてきたことに関し、遠路石和からこれを盛り上げる鍋の具材(大量の野菜)、自家製ワイン(赤白各一升)をご提供いただいた笠原十九司(申山)・陽子(輪院)ご夫妻にも謝意をもって言及せねばなるまい。そもそも、葡萄園を取り仕切るなどという作業は輪院さんだからこそ可能なものの、軟弱なわれらには及びもつかぬ世界で、さればこそ、ひたすら感謝の意をもって痛飲・痛食(という単語があったっけ?)するばかりであった。

ご夫君申山さんは中国近現代史家で、南京事件にご造詣が深い革新派の研究者である。氏の俳句そのものは一種独特な雰囲気――いわば申山ワールド――を帯びており、折々思いもよらぬ「字余り句」をものされる。いわく、「少し早めに読めば字余りとは感じなくなる」ものだそうな。とはいえ、氏は地元で短歌サークルにも参加して研鑽を積んでおられるし、先年、第一句集『立葵』(本阿弥書店、二〇一八年)を刊行されてもいる。いわば本格的な歌人にして俳人なのである。

わが句会として忘れ難いこととして、仲間の三名もが【アルコール依存症】とその延長線上で、天寿を全うすることなく早逝されたという悲劇をあげておかねばならない。

お一人は「日本国際問題研究所」の同僚でもあった秋田のご出身で軍備管理軍縮問題専門家の佐藤榮一(東峰のち秀峰)さん。次いで、山形出身で出版課を担っておられた斎藤修(修風)さん。最後に、長野県出身で、ＡＳＥＡＮ研究者の玉木一徳(泰山)さんである。

俳句という点では、斉藤修風さんが一段高みに立っており、とりわけ

茶屋忙し天橋立走り梅雨　修風

わが村に誇るものなし蝉時雨　同

の二句は深くわれらの記憶に残っている。

他方、人間的にもっとも印象が強烈であったのは佐藤秀峰さんであった。かれの人となりについては、所属した「日本国際政治学会」の同僚諸兄姉にもその酒豪ぶりで名を馳せていた。かれが急逝されたのは二〇〇一年三月一五日のことであった。

群れ飽きて一羽離るゝ寒雀　　双掌

秀峰さん逝去から一ヵ月後の四月一四日には、かれがこよなく愛していた武蔵野・平林寺で追悼句会を催した。この句会での高得点句は以下の三句であった。

花筏漕いで彼岸に着けるやら　　嗚呼晴

花に酔ひ酔ふて人恋ふ師でありき　　双掌

俺ここぞ若葉ゆすりぬ平林寺　　輪院

最後に玉木泰山さんは、悲しむべき事に、ご家庭の不和を口実に酒浸りとなった恨みがあり、天寿を全うし得ず早逝されたのである。

鍋の座の一人欠けたる広さかな　双掌

われらの句会では、毎回参加者の互選でで「天・地・人」の三賞を選んできた。以下には、一九九四年の第一回句会以降の全句会と各回の最高得点句のみを示しておこう。

一、一九九四年一一月（麹町・割烹「味館」）
佐藤東峰（のち、秀峰）長雨に訪う人もなく萩の花

二、一九九五年八月五日（欅里庵）
黒柳双掌　みちのくの無人の駅の蝉時雨

三、一九九六年一月二七日（平河会館）
黒柳双掌　悪たれがぐゐともたげし初氷

四、同年九月二八日
斉藤修風　コスモスの咲き放題の過疎の家

五、一九九八年七月一一～一二日（一碧湖吟行「稜光倶楽部）
櫻川明陽　紫陽花の押し花ありし古手紙
黒柳双掌　なつかしや母かなくぎの夏見舞い

六、一九九九年二月二〇日（欅里庵）
玉木泰山　かまくらの白きぬくもり燭に揺れ

七、同年一二月一八日（欅里庵）
佐々瞬河　子らの声吸ひて幾歳鍋のひび

八、二〇〇〇年八月二日（欅里庵）
黒柳双掌　打ち水に老舗暖簾の藍冴えて

九、同年一一月二五～二六日（下呂温泉吟行「パストール下呂」）
稲葉嗚呼晴　薄紅葉地蔵尊の頬染めて

一〇、二〇〇一年一月一六日（欅里庵）
黒柳双掌　父傘寿頑固一徹味噌雑煮

一一、同年四月一四日（平林寺「むさし野」）＝東峰さん追悼

稲葉嗚呼晴　花筏漕いで彼岸に着けるやら

一二、二〇〇二年一月五日（品川吟行「船宿・平井」）

黒柳双掌　棲み分けて海鵜ばかりや凍て干潟

小田川若水　みぞるるや一羽一羽の川鵜かな

一三、同年九月一五～一六日（別所温泉吟行「玉屋旅館」）

玉木泰山　画学生戦に散りぬ秋古刹

笠原山猿（のち、申山）　無言館妻を描きて逝きし秋

一四、二〇〇三年一月二五日（新春ネット句会）

佐々瞬河　採用の二字なぞりおり春隣

一五、同年三月二九～三〇日（石和温泉吟行「糸柳」）

宮本賽亭　引鴨の発ちし水面や風光る

櫻川明陽　色も香も昼にまさりて梅月夜

一六、同年五月一〇日（第二回ネット句会）

黒柳双掌　また一つ花の名を知る四月かな

一七、同年一〇月一一～一二日（湯檜曽温泉吟行「もちや旅館」）

櫻川明陽　登るほど色めかしけり山紅葉

一八、二〇〇四年一月一一日（欅里庵）

笠原輪院　鏡餅ふつと笑みする道祖神

一九、同年三月二七～二八日（真鶴吟行「味豊」）

黒柳双掌　遠霞けふの宿りはあの辺り

二〇、同年一〇月二三～二四日（湯野浜温泉吟行「潮音閣」）

毛里井静　庄内に台風一過捨案山子

嵯峨紫文　月白く風唸り上ぐ出羽の浜

二一、二〇〇五年一月八日（欅里庵）

宮本賽亭　雑煮食う孫の危うき箸使い

二二、同年三月二六日（「浅草吟行・屋形船「野田屋」）

黒柳双掌　うらゝかや江戸裏店の眠り猫

二三、同年一〇月一五日（裂石温泉吟行「雲峰荘」）

嵯峨紫文　秋草の彼方は富士か峠道

同　ひからびし虫の骸を雨送る

毛里荒人　虫の音や夜陰の底に命あり

二四、二〇〇六年一月九日（欅里庵）＝新春句会

黒柳双掌　寒月に兎を見しはいつのこと

二五、同年三月三一～四月一日（喜連川吟行）

毛里井静　古桜にいにしえ人の声聞かむ

二六、二〇〇七年一月八日（欅里庵）＝新春句会

毛里荒人　行き過ぎて戻れば冬の桜かな

二七、同年四月二八日（武蔵野吟行）

毛里井静　国を分く寺廟を越えて黄蝶かな

二八、同年一一月一七～一八日（石和吟行「日の出温泉」）

佐々瞬河（改め、みほ女）　子を膝に蜜柑むく日の遠かりき

二九、二〇〇八年一月六日（欅里庵）＝新春句会

毛里井静　歳めぐり獅子舞の子の逞しく

三〇、二〇〇九年一月一一日（欅里庵）＝新春句会

宮本賽亭　正座する母の背丸し福寿草

三一、二〇一〇年一月九日（欅里庵）＝新春句会

黒柳双掌　膝の子にまた吹いてやる薺粥

三二、二〇一一年一月八日（欅里庵）＝新春句会

笠原申山　木枯の掃き清めたる星の天

三三、同年一〇月一日（石和吟行「君佳」）

毛里井静　百体の仏の笑みや乱れ萩

三四、二〇一二年一月七日（欅里庵）＝新春句会

毛里荒人　家々の歴史をつなぐ雑煮かな

三五、二〇一三年一月五日（欅里庵）＝新春句会

小田川若水　初場所や桟敷を彩る艶姿

三六、二〇一四年一月一三日（欅里庵）＝新春句会

黒柳双掌　母見舞ふ遠き家路や初景色

三七、二〇一五年一月一二日（欅里庵）＝新春句会

櫻川明陽　一瞬の切っ先あがり寒稽古

三八、同年七月九日（金沢「すみよしや旅館」）

櫻川明陽　加賀言葉これも一品夏座敷

三九、二〇一六年一月九日（欅里庵）＝新春句会

小田川若水　淑気満つ神話の島に波静か

黒柳双掌　荒行に裸形犇めく淑気かな

四〇、二〇一七年一月一七日（欅里庵）＝新春句会

毛里井静　初硯喜寿を迎へて夢と書く

四一、二〇一八年一月二一日（欅里庵）＝新春句会

櫻川明陽　すずやかな赤子のまなこ福だるま

四二、二〇一九年一月一四日（欅里庵）＝新春句会

稲葉嗚呼晴　菜園の四温のバケツ薄氷

櫻川明陽　指呼の間四島（しま）も三寒四温かな

四三、二〇二〇年一月六日（欅里庵）＝新春句会

佐々みほ女　初春やただ居ることの有難し

俳ソサエティについて最後に特記すべきは、「新型コロナ・ウイルス感症」（ＣＯＶＩＤ１９）のこと。二〇二〇年早春に「ダイアモンド・プリンセス」という豪華クルーズ船の乗員乗客が集団感染（いわゆる「クラスター」化）したあたりを発端とするＣＯＶＩＤ１９禍は、三つの波を形成しつつ、三十万余の感染者を生み、政府・国民を前代未聞の苦境に陥れた。政府は、二度にわたって「緊急事態宣言」（いわば戒厳令）を発し、飲食店の営業自粛、国民の外出自粛を求め、懸命に感染拡大の抑制を図った。企業や学校ではインターネットを利用した「テレ・ワーク」や「遠隔授業」が推奨された。かくして、わが俳ソサエティでも一九九〇年代央より吉例となってきた「新春句会」の開催を自粛せざるを得なかった。

当時急速に浮上してきた「ＺＯＯＭ」という遠隔ミーティングのツールを活用して「新春ＺＯＯＭ句会」案が浮上し、現役教授の稲葉嗚呼晴さんがホスト役となって、リハーサルを挙行して実現性が確認され、二〇二一年一月二三日（土）午後二時、俳ソ史上初のＺＯＯＭ句会が実現され、毛里荒人・井静、笠原申山・輪院、櫻川明陽、稲葉嗚呼晴、佐々みほ女、安倍きみ女、および当方の九名が参加した。

初日記・古日記・団欒を兼題とする新春ＺＯＯＭ句会での最高得点句は、みほ女さんの

読まぬまま棺へ夫の古日記　みほ女

で、天３票、選２票の計11点を獲得した。さらにみほ女さんは

来し方はつづら折りなる老いの春　（４点）

コロナ禍に逝く人あまた冬銀河　（３点）

を獲得して、ぶっちぎりの最多得点者となった。

ＺＯＯＭ句会（その後、Ｓｋｙｐｅ句会）は、その後三年の定型となった。
それぞれの最高得点句は、以下の通り。

二〇二一年新春
はけの道ゆるゆる辿る木の芽時　荒人

同年夏季
北斎のやがて画となる青田かな　明陽

同年秋季
収穫の葡萄畑へ御礼肥　申山

二〇二二年新春
病窓に上がる歓声初日の出　荒人

同年春季
人たれも秘めしこともつ朧月　申山

同年夏季
生きてゐる独り爪切る半夏生　申山

同年秋季
色恋の欠片も失せてただ秋思　双掌

二〇二三年新春
蟄居はや三年旅は双六で　荒人

同年春季
春雷や異国のいくさの音に似て　井静

同年夏季
手花火や笑顔の先の深き闇　みほ女

同年秋季（井の頭吟行）
湧水に黄葉ひとひら舟となる　明陽

二〇二四年新春
若潮を汲める能登の海（み）還らざる　申山
晦日蕎麦よそひ肩の荷おろしけり　みほ女

最後に、当初会員に名を連ねられたが、その後、あれこれの理由で句会から足が遠ざかっていった諸兄姉についても言及しておきたい。

山極晃（栗毬）中国近現代史家（故人）
花も見ず酒杯も干さず友逝けり

中村平治（空桶）インド政治研究者（故人）
初春やガンガーの水清からず

加茂雄三（菫山）ラテンアメリカ史学者（故人）
歴史あり四条河原の枯れすすき

小田英郎（霧岳）アフリカ研究者
ザンベジの芒穂ゆれて象の影

宮本武夫（賽亭）参議院事務局調査員
すすき葉を飛ばし競ひし日を想ふ

山本武彦（山彦）早稲田大学名誉教授
初めての出会いも和む花火の輪

志鳥學修（鹿山）武蔵工大教授
涼しさを花火に映し妻の顔

嵯峨隆（紫文）静岡県立大学名誉教授
戻りたる賀状無沙汰を責むがごと

小田川興（若水）朝日新聞論説委員
還暦の年酒温め独り坐す

このように、旧知の間柄で多士済々なメンバーによる句会で、和気藹々として笑顔が絶えない場でありながら、相互批判となると歯に衣着せぬ丁々発止・侃々諤々たる議論が展開されてきたのは自然の流れであった。

席亭ともいえる荒人・井静のご夫妻は、本句会の最長老で、「老成した感」のある句をものされるが、ご夫妻の間に相通ずるものがおありなのか、何らかのテレパシーの働きか、選句において相互の句を取られることも少なくなかった。

次いで申山・輪院のお二方には、日常生活上の齟齬のようなものが覗える掛け合いを聞かせていただいたが、輪院さんの献身的な葡萄園経営への感謝の念が申山さんの出句に余すところなく表され、両者のギャップが多くの句友の笑いを誘ってきた。

頑健な体躯の持ち主の明陽さんは――参議院事務局調査員というご経歴を反映してか――内外時事を描いた句も多いが、季語の世界にもご造詣が深く、キラリと光る句をものされてきた。

みほ女さんは、ご高齢のお母上・伯母上の介護に励まれていると聞くが、出句にもしばしば母上が登場される。自然体でフェミニンな香りある句を詠まれる。

きみ女さんは、旅行・寄席・くずし字など多趣味な女性でありながら、その句は気っぷの良い、いなせで「竹を割ったような」雰囲気を感じさせる。

嗚呼晴さんは、句会でただ一人の現役（名城大学教授）で、海外調査のため頻繁に世界を駆け回っておられ、句会への出席は残念ながら少なめである。

最後に古川恵寿さん。リモート句会にはご参加されなかったが、吟行ではいつも賑やかに場を明るくしてくださる貴重な存在である。

末尾ながら、本句会が会員諸兄姉にとって貴重な憩いの場であり、実り多い癒やしの場として長く記憶に残るよう祈念して「俳ソサエティ句集～山葵」のまえがきとしたい。ちなみに、句集のタイトルを「山葵」としたのは、わが句会が侘び・寂びの感興に満ちたものであれとの願いを込めたものである。

【双掌記】

交遊抄

俳句の師匠

毛里　和子

1965年から私は外務省傘下の日本国際問題研究所で研究員をしていた。70年に細身の青年が入所してこられた。以来40年以上親しくお付き合いいただいている黒柳米司氏だ。

ASEAN研究の第一人者で、かつては副学長として大東文化大学を率いてこられた。そんな先生を普段は双掌師匠とお呼びする。

94年、彼を中心に十数人の俳句〝結社〟「俳ソサエティ山葵の会」を作った。以来、双掌師匠に導かれて年2回の句会を楽しんできた。総じて句は上達せず、師匠には申し訳ないが。

同人は笠原十九司氏（都留文科大）、櫻川明巧氏（金沢工業大）、稲葉千晴氏（名城大）、安倍公子氏（邦楽社）など多士済々だ。夫も「荒人」の俳号で参加している。

恒例の新春句会は拙宅で鍋をつつきながら開く。遠藤周作氏の狐狸庵にならって欅里庵と僭称している。楽しみは作句、賞の選定後の講評だ。師匠の評言を聞き、それぞれが思う存分自句以外の欠点を指摘し、激論後に大笑いする。

次の句が印象に残っている。「この村に誇るものなし　蟬時雨」（故・斎藤修風作）、「ふりかえりふりかえりする紅葉かな」（毛里荒人作）。もちろん双掌師匠の名句「道問へば辛夷の辻を右へとぞ」などである。（もうり・かずこ＝早稲田大学名誉教授）

原載『日本経済新聞』朝刊（2015年6月13日）「交遊抄」

このたび、われらの俳ソサエティは三十年余に及ぶ活動の跡を回顧し、記憶にとどめるべく「俳ソサエティ句集〜山葵」を編むことになった。これに収録すべき駄句を選び出すため、あれこれの記録・記憶をまさぐり、これまで詠み散らしてきたものから、四季・新年の各季に分け、各一〇句ほどを選び出してみた。それぞれにこれを詠んだ折りの思い入れを一行のコメントとして追記した。

思えば、一九九五年に、思いもよらず「肺結核」という業病にとりつかれ、苦境を忘れるべく毎夜就寝前に季語を定めて夢でも句を詠むことを日課として以降三〇年ばかり、俳句は当方にとって無上の、そして不可欠な道連れであった。この世を去るまでにはこれらを「双掌句集〜十日の菊」として取りまとめるつもりでいるが、今回の企画はその予行演習として貴重な機会を提供してくれた。

それにしても、だからこそ、当方には「闘病俳句」という範疇にかぞえられる駄句が多いのだろう。同様に、今や高校生になった双子の孫にちなむ「孫俳句」も少なくない。

定年後には、健康維持のための「万歩行」を日課として、それなりに懸命にこれを果たしてきた。その途上には喫茶店での珈琲タイムをはさみ、茶房での憩いのひとときも作句の貴重な機会であった。僭越ながらこれらを「茶房俳句」と呼んでおきたい。

【春】

旅立ちの初志固かれと春寒し

早稲田大学ゼミの卒業生を送るに際して。

花に酔ひ酔へば人恋ふ師でありき

思いもかけぬ佐藤東峰さんの急逝を悼む。

遠霞けふの宿りはあの辺り

真鶴吟行で、真鶴半島の遠景を臨む。

春炬燵女房殿の鼻眼鏡

当方は藤澤周平を読み、女房殿は編み物。

荒れ寺の傾ぐ甍や風光る

石和吟行での即興。

かねて聞く常春慕ふ旅出とや

娘の義父の逝去を悼み、義母に謹呈。

うらゝかやこともなげなる癌告知

獨協医大病院の医師「転移性肺がんですね」とあっけらかん。

惜しきまで百花咲き次ぐ四月かな

初めて「朝日俳壇」で入選（稲畑汀子選）。

【夏】

今年また花ある旅の立夏かな

ひたち海浜公園はお気に入りの場所。

七夕や孫の短冊さかさ文字

その孫たちもいまや高校生。

茶野街の塀は紅殻夏燕

金沢吟行でひがし茶屋街を散策。

球児らの汗泥涙清々し

甲子園での熱戦はいつも感動的。

打ち水に老舗暖簾の藍冴えて

一人旅で妻籠・馬籠街道をぶらついた。

愚直なれ母の諭しや立葵

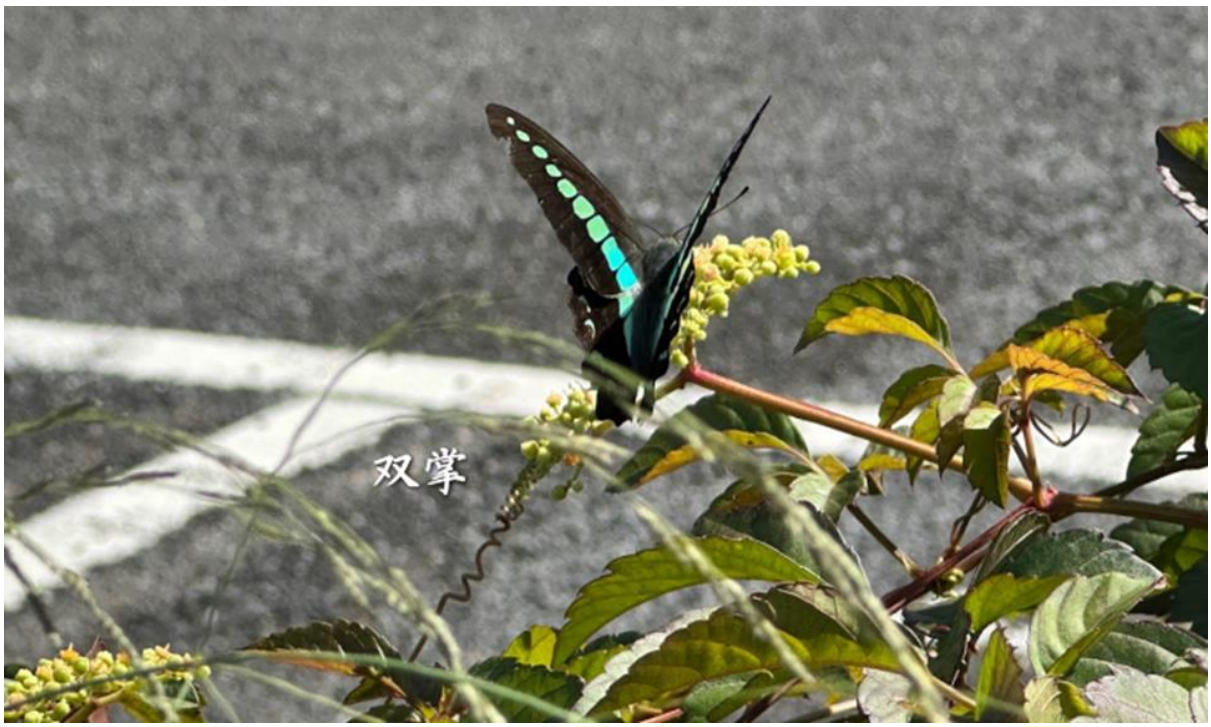
亡きお袋様の口癖「真面目にやりなよね」。

梅雨晴れ間露地に繰り出すもへじかな

子どもらが地面いっぱいにチョークで落書き。

色恋を忘れて久し冷や奴

文字通りの実感。



【秋】

露地ごとに丹精の菊三之町

飛騨高山吟行は露地こそ見所。

喰ふて寝るのみの病棟夜長し

腎臓の部分摘出後の入院生活。

蟋蟀に迎へられたる鄙の宿

大菩薩峠吟行の宿は軒が傾いていたが。

小春日や蟻を横目に茶をすゝる

昇仙峡の茶屋の縁台横に蟻の列が。

新蕎麦の幟に惹かれ昼餉かな

石和吟行での新蕎麦は美味しかった。

孫呼んで影踏みしたき良夜かな

「良夜」という季語の魅力は格別。

予後の身を踏み出す街の残暑かな

肺結核で一八ヵ月余の入院を終えて。

【冬】

群れ飽きて一羽離るゝ寒雀

思いがけない佐藤秀峰さんの急逝に衝撃を受けて。

己より若きも逝くか冬深し

昨今では、メディアの訃報を見逃せない。

寒月に兎を見しはいつのこと

煌々と冴え渡る月面には餅をつく兎の影がくっきり。

異界への扉軋むや虎落笛

夜来の轟々たる虎落笛の音は不気味で不安にされる。

遠富士の威儀に寄り添ふ寒夕焼け

越谷からも折々見事な影富士が遠望できる。

懐手触るゝあばらも傘寿かな

体重「減」は当方にとって最大の心配事。

湯たんぽや寝床に書斎居間厠

当方、無類の寒がりにて。

鍋の座の一人欠けたる広さかな

折りにふれて玉木泰山さんを思い出す。

【新年】

数へ日や明窓浄机整はず

書斎の整理は年来の課題だが今年も果たせず。

荒行の裸形犇めく淑気かな

年末に多い寒行のＴＶ映像を見て。

小さき夢ゆゑに小さき福達磨

大きな福達磨では釣り合いがとれぬ。

三河人頑固一徹味噌雑煮

亡き親父さまが大好きだったなぁ・・・。

聞くのみとなりて久しき除夜の鐘

二昔ほど前には「撞きに」出かけたものだ。

夢問はゞ酔ふて半眼寝正月

禁酒禁煙となったのはいつの頃からか。

屠蘇に飽き茶房に憩う至福かな

スターバックス賛歌。

道すがら唱えて来しか孫の賀詞

孫たちの年始はいつまで続くかなぁ。

佐々みほ女句集

【春】

不世出のヘンなオジサン惜しむ春

コロナ禍の恐ろしさを志村けんの急死が世に知らしめた。

振り向かぬうしろ姿の朧かな

さよならしてから一回くらい振り向いてくれてもいいじゃない。

春の日に残虐非道の性悲し

ロシアのウクライナ侵攻に。

頬寄せて朝寝の父にねだるもの

娘は父におねだりがじょうず。

確執を越ゆるすべなく春炬燵

どうしても許せないことを許すことはできるのか。

絵筆手にあなたの笑顔春の雨

春の雨は身も心も緩めてくれる。

【夏】

処女作の評判高く鮨食へり

次男の漫画『不思議の国のバード』が朝日新聞の書評欄に載って。

緑陰や子らの駆け寄る水飲み場

子どもたちをよく公園へ連れて行った夏の情景。

待つ日々に倦みて薄暑の路上飲み

コロナ禍のもと巣ごもりに飽きて路上で酒盛りする若者も。

緑陰に読書する日の愉悦かな

こんな日が最高。

青葉風すれちがう人きみに似て

街を行くと亡き人にそっくりな人が。

手花火や笑顔の先の深き闇

花火はまわりの闇がどこまでも。

夕まぐれ吾を通りすぎ児を刺す蚊

幼子はおいしそうな血のにおいが？

西日さす読経の伯母の小さき背に

御仏壇にお供えと読経を日々欠かさない。

【秋】

梨むけばやや賑わへる老いの卓

初物はうれしいものだ。

疎まれつ地蔵によりそふ死人花

彼岸花は庭に咲くと忌み嫌われた。

こほろぎの絶えし闇夜のしじまかな

コオロギの鳴き声をいつまでも聞いていたかった。

子ら去りて部屋のかたすみ秋思あり

息子たちが巣立ち、一抹の寂しさ。

この桃のごとく生まれよお腹の児

長男の第三子誕生を控えて。

落ち葉ゆれ人待ち顔の舟つき場

井の頭公園では若かりしころ夫がよくボートを漕いだ。

井の頭いのちの水に黄葉散る

湧き水は神田川となる。

天高し緋鯉真鯉の口や口

池には麩を求めて鯉たちが口をパクパク。

【冬】

寒稽古帯結ぶ手に朝日かな

習っていた空手教室では冬の素足の冷たいこと。

寒稽古子らの声音のいや高く

冬の空気には子供たちの掛け声がよく通る。

三寒に静寂の滝四温待つ

滝も凍る厳冬に。

遠き日の父の姿や冬木立

口数が少なかった痩身の父を思う。

山茶花や散り積もる紅そよぐ白

庭にも散歩道にもおびただしい落花。

夢叶ふ夢より覚めし日向ぼこ

ステージで歌う舞姫になる夢は、やはり夢だった。

晦日蕎麦よそひ肩の荷おろしけり

三六五日ご飯を作り続けてまた一年。

寒椿義母と競ひつ落ちにけり

いさぎよく生きた義母は、椿の咲くころ逝去。

【新年】

珍客の名をまず記す初暦
　久々に会う人の来訪は胸が躍る。

人の世のすごろくに似る運不運
　人生の何割が運なのか。

地震襲ふ初春の宴をことほぎを
　能登の人々も新年を祝っていたさなか、地震が襲った無残。

老母にはちぎりて入るゝ雑煮餅
　お餅を喉に詰まらせたらたいへん。

安倍きみ女句集

【春】

やめてみた義理のつきあい古稀の春

年を重ねて良いことは、自由な気分になれること。

老叔母の息絶えしごと大昼寝

九三歳のおば。時に昼まで熟睡し、訪問介護師を慌てさせる。

杉花粉くしゃみ鼻水眼に涙

半世紀以上のつきあいの花粉症。

春暁や昨日の怒りおさまらず

勤めていた頃の眠れないほどの怒り。さて何だったか。

侵略を止める術なし春の闇

二〇二二年二月二十四日、ウクライナへのロシア軍事侵攻。

春の雨禁酒似合わぬ人の逝く

佐藤榮一さんの急逝を追悼して。

叶わざる花見の帰国一周忌

台湾の小山綾子さん「桜が見たいから来年帰るね」。

栗毬の遺句しみじみと春の雨

山極晃先生の偲ぶ会で披露された三十五句に感銘。

【夏】

炎天を闊歩する我潔し

勤めていたころ自分をホメながら相手先へ歩く、歩く。

すれ違う羅（うすもの）の襟凛として

夕方の赤坂見附駅ホーム。真夏に凛と涼しげな着付け。

潮の香にきりりとしゃんと藍浴衣

伊東で目にした藍の浴衣を粋に着こなす女性。

梅雨晴れや作陶の手つき褒めらるゝ

伊東で陶芸体験。ホメ上手の先生「手つきがいいわねぇ」。

投げて吼え打ちて笑顔の汗眩し

毎朝のＭＬＢ中継、大谷翔平クンにドキドキ、ワクワク。

避暑地とす図書館は椅子あと一つ

酷暑の日は図書館へ。空いてる椅子一つ。ラッキー。

ロスタイム笛非情なり熱帯夜

サッカー日本代表の試合。惜敗にため息。

北の空紅流すごと雷の後

ムンクの「叫び」の夕焼けとそっくりな景色を見て感動。

【秋】

刃を入るゝ音に林檎の味を聴く

リンゴにナイフを入れた音で、美味しさがわかる。

定食は煙に誘われ初秋刀魚

新橋の定食屋。路地に漂ってくる秋刀魚の煙と匂い。

色変えぬ松を背に立つ弁天堂

井の頭吟行。能舞台の松羽目を連想する松と弁天さま。

列島の背骨全山うすもみじ

友人の車で秋田から岩手に横断した時の雄大な景色。

長き夜や明日のことのみ考える

ストレスで出社拒否寸前。とりあえず明日だけ出社しよう。

畑や里熊彷徨いて冬支度

熊も生き延びるために必死です。

急逝に愁思の黙(もだ)や通夜の席

親しくしていただいた箏曲家が自宅で心筋梗塞。

【冬】

大晦日泊まり客来る午前二時

東京ドームのカウントダウンコンサートを楽しんで帰宅。

温泉（ゆ）の宿の塗の小椀の晦日そば

大晦日の熱海の宿。「お凌ぎ」に朱塗椀の上品な晦日そば。

友帰り晩酌の癖残る寒

数週間滞在した友は帰宅。晩酌の習慣だけはいつまでも。

古稀の子と白寿の母と日向ぼこ

老人ホームの玄関で日光浴しながらのどかなひと時。

日向ぼこ老母の足の爪を切る

足の爪は厚くなって切りにくく、日溜まりで母は大騒ぎ。

世紀末飛騨はおだやか冬紅葉

二〇世紀末のなつかしい飛騨高山吟行。

コロナ禍の窓開く電車底冷えす

一車両に数人乗車でさえも、厳冬に窓を開放。

【新年】

箱根路を駈けるる子ら待つ二日かな

箱根駅伝の選手を大平台の沿道で声援。

芸者衆に屠蘇を注がれれし宿の朝

元旦の伊東。朝食会場で芸者さんが屠蘇のサービス。

呑みて寝て少し飽きたる三日かな

のどかなたのしい三が日。

初場所や騎馬民族の揃い踏み

モンゴル勢のお相撲さんの大活躍。

松過ぎて志の輔を聴く能舞台

銀座の観世能楽堂で志の輔独演会。最前列での至福。

どの髭が福を招くや達磨市

微妙に髭が違う達磨さん、どのお顔を我が家に招くか。

疫病に振り回されて去年今年

コロナ禍の異常な三年間。

元日や次は何処に大地震

阪神・東北・熊本・能登ときたら、次は関東ですか。

櫻川明陽句集

【春】

幾百の蝶の舞かな花吹雪
　桜は老木だが散るは見事。

甲斐路にはまだ遠かりし花便り
　吟行した桃源郷に春はまだまだ。

梅咲くも帰還困難放射線
　ボランティア参加した南相馬の梅は満開だったが。

色も香も昼にまさりて梅月夜
　石和吟行では梅が月あかりに映えて。

激流にいさぎよきかな岩椿
　厳頭の椿はいきなり激しい流れにダイブ。

ふと昭和よぎる銀座の柳かな
　銀座で昔の唄を思い浮かべ東京マラソン完走。

朝寝して妣（はは）の一喝なつかしき
　よくたたき起こされたものだがその母は。

学らんの指少し出て一年生
　中学一年生になる孫が見せに来てくれた。

平らかに佐渡を浮かべて四月かな
　“荒海や…”のイメージが強い日本海だが。

戦場の十字架おぼろ墓累々
　無辜のウクライナの人々を襲った悲劇。

【夏】

大花火四年我慢の大歓声
　待つこと四年コロナ禍あけの長岡花火。

朝の陽に一筋光る蜘蛛の糸
　雨上がりの朝のベランダには。

緑蔭や親もまどろむ絵本伏せ
　公園で若いママもお疲れの様子。

北斎のやがて画となる青田かな
　どんな画になるか行田市の田んぼアート。

青田波村大海となりにけり
　北陸新幹線の車窓から見る砺波平野と散居村。

加賀ことばこれも一品夏座敷
　金沢老舗旅館“すみよし”での吟行の夜。

悪餓鬼が来るぞみんみん早よ逃げよ
　捕虫網をもって探し追い駆ける孫たち。

柳寛順（ユ・クァンスン）祠堂をつつむ蝉しぐれ
　十七歳で獄死した韓国のジャンヌ・ダルク。

竹婦人恋しき程の今宵かな
　この熱帯夜もう我慢できない。

八十路われ暑さものともせずテニス
　炎天下いまも若者相手に。

【秋】

微睡める金時山頂秋の風
　兄弟で箱根旅行しひとり金時山へ。
登るほど色めかしけり山紅葉
　谷川岳の紅葉は登るほどに色づきよく。
湧水に黄葉ひとひら舟となる
　井の頭公園の湧水は神田川の源流とか。
群青の空を染めゆく薄紅葉
　東京の真っ青な空の片隅には薄紅葉が。
笹緑ありて際立つ紅葉かな
　笹に囲まれた紅葉は一層引き立つ。
還られぬ住まい十年柿たわゝ
　東日本大震災十年無人の庭には柿だけが。
顔かくす故に美くし風の盆
　八尾風の盆傘のうちの女性の顔は。
休みやのおわらの笠に秋茜
　茶休みする踊り手の脇の傘に赤とんぼが。
出遅れの孫二番なり運動会
　あゝスタートさえ失敗していなければ。
傘寿なる深き秋思のひと日かな
　八十歳ともなると来し方を色々と。

【冬】

アイゼンを辿ってみたし横岳へ
　北八ヶ岳雪の横岳山頂に立ってみたい。

五歳児に負けぬぞスキー傘寿われ
　子どもは上達が早いが自分だって。

湯けむりの揺蕩（たゆた）う闇の冬銀河
　孫たちはスキー我はひとり露天の湯を満喫。

三百年鎮まる富嶽冬茜
　一七〇七年の大噴火以来鎮まっているが。

本閉じて我に返れば寒析（かんたく）か
　何処からか“火の用心”の声と拍子木が。

熱燗や週のメにはもう一本
　今週もよく働いた（傍を楽させた）ご褒美。

一瞬の切っ先あがり寒稽古
　初段だが背筋を伸ばし息を整えて。

腕白もけふは神妙七五三
　紋付に羽織袴ちょっと気取った顔をして。

指呼の間四島（しま）も三寒四温かな
　納沙布岬の目と鼻の先の北方領土に春は。

身のちぢむ寒さよ能登の避難者よ
　厳しい寒さだが能登の人々を思えばこれくらい。

【新年】

永劫の断片なれど去年今年
　人類史の一コマに生かされているに過ぎない我々。

地と天の界（さかい）に入るや除夜の鐘
　苦情があって除夜の鐘を撞けないとは嘆かわしい。

磨るほどに鎮まる心筆はじめ
　孫の書初めを手伝いながら墨のこの香り。

歳古れど三話に尽きぬ初日記
　年寄りの話題は孫・病気・年金ばかりだが自分は。

初笑い歯抜けの孫は口に手を
　乳歯が抜け特に女の子は恥ずかしそうに。

まづ孫の来る日にマルを初暦
　孫たちの来訪は待ち遠しいが来たら来たで。

まあいいか雑煮美味そに母百寿
　心配だが今年も恙なく過ごせるなら。

すずやかな赤子のまなこ福だるま
　赤ちゃんの穢れなきまなこを観ていると。

被災地の正月飾り泥まみれ
　年神様をお迎えする門松・しめ飾りが。

あがり無き双六のやう防衛費
　安全保障環境の厳しさを理由にどこまで。